

49

麻生区
文化協
会文化協
会文化協
報

絵と文・佐藤英行

汁守伝説を伝える古社

汁守神社

黒川地区を南北に横断する鶴川街道から一歩入り鎮守の森に向って石段を昇ると木製の鳥居があり蔽島神社と同じ形のもので両部鳥居といえます。台石には天保五年（一八三四）九月吉日と建てた月日が刻まれています。天保の大飢饉をのりきった村民が例祭日に奉納したものと思われまます。

汁守神社はその昔汁盛神社とも書かれました。その由来は府中大国魂神社の末社として「くらやみ祭」の膳部の汁を調製したのが、おこりであると伝えられます。

社殿、本殿の流造り拝殿の入母屋造りは建築的にも一見の価値あり、その他境内に市保存樹木のモミジ・杉・ソロ・カシ・ヤブツバキの大樹が社台をおおって夏でも涼しい風を集めています。

創建・天明二年（一七八二）推測

宝物・師子頭三

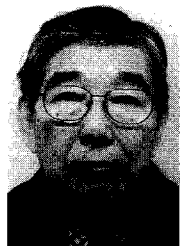
祭神・保食命 うけもちのみこと 素盞鳴尊 すさのおのみこと

大己貴命 おほむちのみこと 応神天皇 おほしんてんのう

文説「ふるさとを語る」参照

継承と創造

副会長 千坂隆男



ている。

「本会は麻生区民の文化活動を振興し、地域文化の向上及び交流を図ることを目的とする。」

これは、麻生区文化協会規約の第三条に掲げた「目的」である。

今を去る二十六年前、麻生区役所第一会議室で設立総会を持った。(昭和五十九年十一月十日) 集う会員は、個人会員九十名団体会員七団体であった。

市内で一番年の若い麻生区文化協会は、他の文化協会の歩みを他山の石として進むことができた。ともすれば、芸能関係中心になりがちな文化協会の活動を、「区民の多面的な文化要求に応えることができる文化協会、地域に密着し区民に開かれた文化協会」とと焦点を絞った運営がなされてきた。しかし、二十六年間の歩みを振り返ったとき、掲げた目標を達成したと言いつけるだろうか。

私個人の歩みを振り返ってみる。平成九年の入会。この年から美術展に写真が展示されるようにな

った。そして指導者展と称していた名称を作品展とし、文化協会の会員であれば誰でも参加できるようになった。

平成十年広報部長に就任、会報「からむし」の作成に関わるようになった。麻生のために尽くした人々を発掘する「麻生人物風土記」と会員が自らの文化活動を振り返る特設頁は共に継続していききたいものだ。

平成十三年から総務を五年間務めさせてもらった。麻生区には文化協会以外に多くの活発なサークルがあることを知る。また、行政の主導で「音楽の町川崎」の旗のもと「麻生音楽祭」が生まれ、団体会員が抜けていった。組織としては複雑な思いである。

川崎市文化財団が「アルテリツカしんゆり」を開催するに当たり、美術展の共催を持ちかけてきた。我々はこれを会員自身の資質の向上に役立てたいと考えた。

絵画は百号以上、写真は一テー

マを三点で構成するなど一定の基準をもうけ、質の高いものを狙った。デッサン会が一般市民を対象にした啓発活動であるのに対し、文化祭の展示は会員個人の力を示すものであり、アルテリツカは麻生区文化協会の美術力を見て頂くものである。平成二十三年のアルテリツカしんゆり美術展はすでに早々と継続の話が出ている。

麻生区文化協会の伝統行事としては、七草粥の会がある。文化協会結成二年目、アカデミー部会の新年懇親会が始まりである。細山郷土資料館を借りて、多彩なプログラムを展開していた。文化協会の会員と招待者等六十名ほどの集まりであった。こんな素晴らしい催しを広く区民の皆様に提供できないものか、という発想で立ちあがったのが、「あさお古風七草粥の会」である。文化協会会員の努力、麻生子供会連合会始め諸団体の協力、麻生区役所地域振興課の物心両面の援助があつて継続して行っ

歴史である。民俗伝承の行事である。「お正月」の歌を歌い、書き初めをすることは日本民族固有の文化である。

次世代への文化の継承は、平成十五年に始まった「夏休み親子教室」に求めることができる。

これまでも周年記念行事で単発的に取り上げられてはいたが、継続性と目的意識が弱かった。公立学校の週五日制の実施に即応して「余暇の善用」と「文化の継承」を基本に、夏休みに実施することにした。プログラムの特異性については、伝統芸能と現行の教育課程を考慮したものを組み込んでいる。

私たちの組織の体力と資力ではこれが精一杯である。いやまだ工夫の余地がある。行事に参加した人々、子どもの目の輝きに生き甲斐を感じる。会員の英知を集め実践しよう。

市長は、「こんな質の高い芸術(パレエ)を区民に無料で提供している協会への驚き」と絶賛した。

いのちをはぐくむ《自然と歴史》を次世代に

地域学分野会員 石井よし子

麻生区文化協会に「地域学」という分野もあるということ、杉本長治先生に教わり、背中を押していただき、ある日突然会員となりました。

私が文化協会の会員でいいのだろうかと今でも自問自答しています。大学生だった若い日々芸術学を専攻し、命頼りないときに、自然と芸術と人の心の温かさに遭遇し、昇華させながら来たといっても、ここ二十年あまりひたすら麻生区という地域のこと、良き地域づくりとは何かを考え続けて来たに過ぎません。活動は「言葉と物」が乖離しないように地べたに這いつくばって、試行錯誤しながら継続しております。

原稿をと千坂先生に依頼されて、困ったなと思いましたが、こんな分野の会員を受容する懐の深さが文化協会にあることをお伝えし、折に触れてはお世話になつて諸先輩の方々はこの紙面をお借りして御礼と厚く厚く感謝を申し上げたいと思えました。

麻生市民館社会教育指導員として在館していた五年間は、文化協会の事務局が私のいつも隣にありました。自ずからそこは地域で積み重ねられ、宝物となつて諸活動の実績、長年の暮らしからの智慧の数々、多様な地域情報が、行き交う場所となりました。公民館職員として地域自治と一人一人の人々の幸せを願う日々の仕事に充実したものになりました。また地域人として、市民活動を継続しつつという立場で、社会教育という公務に携わる重さと責任は測り知れないものがありました。「あながままでいい、ゆったりニコニコここに居て」と諭され、励まされると、げんきなもので、すぐ心元気になりました。箕輪敏行先生、山田土筆先生とお名前を挙げて行く切りがなくなり、皆々様ありがとうございました。今後とも一緒によろしくお願ひします。

思えば子どもがまだ九歳でした。心から溢れる思いにつられ地域に

一歩踏み出しました。「多摩丘陵のまちで産まれ、柔らかな心身にその風土を吸い取り紙のように吸収しながら育つ子どものふるさとに親として責任を持ちたい」「どの子も幸せ感を持って育たないと個の幸せもない。子どもが生きやすい地域社会をつくるには」「原風景が破壊され行く現状で、自然と都市の共生は可能だろうか。これからのまちづくりには、人間の叡智が必要とされるのではないか」「わたしたちのまちのことは私たちが決めることができるだろうか」などが基本スタンスとなりました。

以後、地域で人間の叡智探しの旅をしているような気がします。ポール・ゴーギャンの左の言葉が静かな画面と共にあるあの絵が好きです。《Du venous nous ? われわれはどこから来たのか。Où sommes-nous ? われわれは何者か。Où allons-nous ? われわれはどこへ行くのか》

「麻生地域セミナーまちかど探偵団」「子どもが遊べる公園を考える会」「麻生区まちづくり会議」など、「麻生区地域教育会議」「まちはミュージアム」「里山フォーラム」とそれぞれですが、基本の心構えは

同じです。麻生区という一つ所で一つことを身近な足元からやっています。「昨年までの岡上分館での公務」は勿論岡上ででした。

「まちはミュージアムだより」は一四〇号になります。まちはミュージアム遊歩道ファンクラブの里山ボランティアの活動から端を発し、各々の団体が力を合わせてくださって里山フォーラムが誕生し十年目に入ろうとしています。新しく柿生の里クラブも誕生！

このまちの基層を成して来た里地里山環境と文化を新しい希望の灯とともに後世に継いでいきたい。そこに多様性に富んだ「暮らしの歴史」と「命の華やき」を見出します。生きることの基本があるような気がしています。(季節に内在する次の季節を幽かに感じつつ 8.20)



郷土の開発と発展に尽くした白井金治郎さん

岩田輝夫

郷土の細山を乱開発から守り、

地元の人々が先祖代々から受け継いできた農村の保全を図りながら宅地開発を進め、細山・金程地区の土地造成、区画整理という五大事業を成し遂げ、常に郷土のために尽くしてきた金治郎さん。そして細山にはこのような金治郎さんを育て、支えてきた環境があり、人々がいた。(以下の文については、敬称を略して書かせていただきます。)

幼年期と青少年時代

大正二年、細山で父平蔵、母トメの長男として誕生。父の平蔵が仕事で上京していたこともあって、幼児期の金治郎は母のトメの指導と共に祖父の亀吉、祖母のサキの影響を強く受けて育っていった。祖父の亀吉は、物事の道理に合わない事には、例え幼児であろうと厳しく叱った。祖母のサキも人に對する思いやりや優しさを常日頃から身をもって、金治郎達にも分かるように教えていた。金治郎が生田小学校細山分校の四年生の時、関東大震災があり、世界各国からの救援物資が生田小学校にも回ってきた。分教場に割り当てられた物資の受け取り当番になった金治郎



建設大臣表彰受賞記念祝賀会

達三人の児童は運ぶ途中で中身の乾パンを食べ、先生に厳しく叱られゲンコツをもらってしまった。この事を家に帰ってから得意げに話していた時、黙って聞いていた母のトメは「金治郎、お前はそれが自慢なのか。先生のゲンコツがお前には分からねえんだ。嘘をつく事、物を盗る事、他人に迷惑をかける事が人間として一番恥ずかしい事なんだ。」金治郎は、一日中野良仕事で疲れきっている母が、夜中まで働いている姿を思い出しながら、心の中で二度と繰り返さないように母に誓ったのである。このように、人間としての生き方を、母のトメや祖父に、優しさと厳しさの中でしっかりと躰られてきた事がその後の金治郎の生き方に大きな影響を与えるのである。小学校を卒業し、高等科に進学した

金治郎は担任の橘川先生の指導の元に剣道の道を教えられた。この剣道に打ち込んでいった事が後の

金治郎の強い精神力の源になった。昭和二年高等科を卒業した一五歳の金治郎は、当時農村の担い手の養成機関的存在であった生田村青年団細山支部に入団する事になる。将来に大きな夢を抱いた青年達は定期的集まり、それぞれの分野で活動した。この青年団の仲間達の多くが後の大企業でも金治郎の力になったのである。

結婚、そして保険業と海兵団への入隊

昭和一四年の二月に二四歳の金治郎は大木ヤスと結婚。妻ヤスの存在無しには、その後の金治郎の活躍はなかったのではないかと、どんなに苦しい時でも、夫を支え、励まし、陰で頑張ってきたヤスは妻として、母として、金治郎の母トメとともに、金治郎を大きく育てた偉大な女性であったといえる。

昭和一五年に日本生命保険の代理店を始める時も、妻ヤスの「農業は忙しいときだけ手伝ってくればなんとかなるから頑張ってくれ」という励ましの言葉で金治郎の決心がついたのである。翌一六年に太平洋戦争が勃発し、一九年春、三二歳の金治郎にもついに召集令



細山第2土地区画整理組合の理事長として工事現場を視察。
右から4人目（昭和54年）

状がきた。四月に横須賀海兵団に入隊。一九年七月に戦闘機整備兵として追浜基地に配属され、翌二〇年四月に名古屋の明治基地に転属となるが、八月一五日に終戦となり、一年四ヶ月ぶりに復員。戦後新しい村づくりが始まり、青年団は解散し、その組織を継承する形で消防組が組織された。金治郎は細山消防組の初代組頭に就き、副組頭には箕輪辰五郎が就いた。金治郎にとって、辰五郎の存在はその後の人生に非常に大きな影響を持つ事になる。そして、二二年

春には日本生命に入社、二三年には川崎支部の支部長に就くが、ちょうどその頃、農業会が解散となり、生田農業協同組合が設立された。

生田農協の専務に

親友の辰五郎などの説得で生田農協の再建のため、農協の専務理事に就任。二三年に設立された生田農協は地域の人々から信望の厚かった勝呂淵妙氏が組合長を務めていたが、財政面でも運営面でも多くの課題を抱えていた。「俺も三七歳、村のために働いてもいい歳だ」と引き受けたのであったが、困難な仕事が出積していたのである。保険会社も退職し、農協専務職に専念する事になり、各務雄三氏を農協の専務として迎え、二九年一二月に勝呂組合長、白井専務、各務専務のトリオが農協再建への本格的なスタートを切ったのである。その頃、細山分教場から独立した西生田小学校の建替え問題がおきた。三二年六月に校舎改築期成会が結成された。その

年の暮れ、西生田小の改築問題も一緒に取組んでいた親友の辰五郎が突然心不全でこの世を去ってしまった。その後、勝呂組合長が病床に臥すという中でも、金治郎や組合員の努力で、農協再建も順調に進みはじめたのである。

新しい街づくりへ

金治郎は将来の細山・金程全地域にわたって、調和のとれた美しい街づくりを頭に描いていた。三井細山団地造成事業に深く関わり、その後展開される各種造成事業の第一歩を踏み出す事になる。三八年細山多目的土地造成事業組合を結成。三九年四月には病床の勝呂氏に代わり、農協組合長に就任。また、四二年には現在の西生田中学校建設促進会長に就任。この頃、県下では農協合併が活発化してきていた。四四年四月には

生田、稲田、菅、柿生の四農協が合併する事になり、川崎市多摩農業協同組合が発足、金治郎も副組合長兼専務に就く事になる。また、西生田中学校の新校舎も完成し、四四年三月には細山土地区

画整理事業組合が設立され理事長に就任、この頃、後の千代ヶ丘小学校の建設促進会会長に、五二年には細山第二土地区画整理事業組合理事長に就任。五五年五月に細山郷土資料館の開館、十一月には金程・向原土地区画整理事業組合が設立され、理事長に就任。そして、五七年二月には五大事業完成を記念して、香林寺に五重塔を建設する事になり、その建設委員会委員長に就任する事になった。六〇年五月には、金治郎が恩師と仰いだ勝呂淵妙氏を偲び、「わが心の生田」を出版。この間、数々の賞を受賞してきたが、六一年七月には全国に先駆けて行った区画整理事業に対する功績として、建設大臣賞、平成三年勲五等瑞宝章が贈られた。出典「ふるさとを拓く 永遠の郷土」

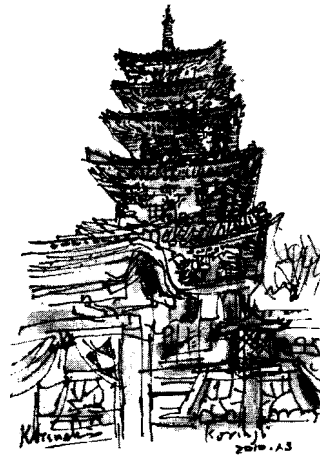


イラスト 佐藤勝昭

「アルテリツカ新ゆり美術展」 美術家協会の立場から

麻生区美術家協会代表 安富信也

第二回新ゆりブレ芸術祭美術展を私は企画実践した麻生美術家協会の代表として美術家協会側からお話してみたいと思います。

当初、第一回目は全く雲をつかむような感覚ではじめたこの展覧会は実行委員の運営力、文化財団側の好意と協力、文化協会側の前向きな姿勢と実行力で成功裏に完了しましたことは多くの関係者が



認めてくれることになり大変良かったと思います。

二回目はマンネリ化に陥る心配がありました。美術家協会側では一つの流派にとられずにそれぞれが強烈な個性を表現した活気あふれる会場となりました。

勿論これは、会場構成を担当した係りの努力とセンスの結果でもあります。

「芸術は時代を表現するべき」と良く言われていますが、しかし絵画の抽象的表現は何を描いているのか分からないと未だに誤解、敬遠されていることが問題といえましょう。問題になっていると思われず。その事で作家は鑑賞者の無理解に悩み、鑑賞者は現代美術を理解できず戸惑いを感じる傾向が生じます。

音楽は音階を楽器で表現するからまさに抽象的な表現で何を現しているかは分かりませんが、視聴者は楽器の音色の音階で感動しま

す。それと同じように、現代美術の抽象的な絵画も色彩と形体で感覚的に理解すれば良いのですが、物の具象的な外観が描かれていないと鑑賞者は無理解を示しがちです。たとえば富士山とか林檎とか薔薇の花とかが描かれていれば理解くださるのですが。

様々な表現の傾向が集合している美術家協会では抽象的表現をする作家は多くはありませんが大作ではかえって抽象的表現の方が時代を表現しているように思うのですが。

第二回目はちょうど文化協会側の二五周年記念パーティと重なり何か文化協会側の勢いに押され気味のところがありませんが、それもまたかえってプラスになり、お祭り気分にもなっていました。

とにかく文化協会側と合同で行うという、いわば変則的な展覧会が、書とか写真、協同制作の生け花とも合いまみれて楽しい企画展



になった事は確かだと思えます。

国立新美術館等で行う公募展や多くの企画展には観られない不思議な現象が出ていましたことは良かったのではないのでしょうか。

「ことしも魅せます麻生の美術力」のキャッチフレーズで第三回目のアルテリツカ新ゆり美術展が行われる予定ですが、私たち美術家協会の各作家側ではそれぞれの美術に対する理念をカンパスや粘土にぶつけ、競い合っており、多くの麻生区の鑑賞者に理解してもらい、感動してもらうような作品を創造する事に邁進したいと思います。

デッサン会報告

民藝の女優を描く

美術工芸部長 山本 絢子

平成二十二年七月三日(土)の午後、『舞台衣装をつけた民藝の女優さんを描くデッサン会』が麻生市民館大会議室で催された。

六十五名の参加者が真剣なまなざしで筆を走らせる。静かな室内には緊張感と熱気が漂い、デッサン会場は、まさに演じる側と描く方のバトルの場となる。

そこで今回は、読者にデッサン会の精神的な魅力も感じ取っていただくようと、両者に会に寄せる思いを語ってもらった。

モデルは入団三年目の将来が囁望されるお二人。その一人、望月香奈さんは、

「描いてくださった絵をみると、いかに私が自分自身を知らなかったか気づかされました。描き手の方の目が、私の全てを見透かしているような怖さを感じながらも、自分と向き合っているようで、とても良い経験でした。」と言います。もう一人のいまむら小穂さんは、

「今回モデルを初体験し、みなさんの作品の中に、たくさんの私を描いていただきました。たった一人の人物をこんなに何通りにも表現できるものなんだ、芝居もこんな風に、自由に創造していいのだと気づかされました。私もみなさんの絵のように、生き生きとした人物を演じていきたいと強く感じました。」と、デッサン会の感想を述べてくれました。

毎年デッサン会に参加し、水彩画のみずみずしい作品を制作される岡本欣三さんに、参加者を代表して描き手の感想を述べていただきました。

「舞台俳優モデルは、舞台のストーリーの中の自分の立ち位置を何かしらイメージし、つまり役作りを努力しているプロセスの心の揺れがあり、それが心意気として伝わり、描き手の制作意欲を素直に後押ししてくれるようです。

会の冒頭で、田口民藝絵画部主

宰から描き手に思い入れしやすくすべくモデルの民藝での活動の様子、モデル自身の心意気ある自己紹介等を披露していただく配慮は、そのモチーフ(モデル)への思い入れの時間を提供してくれている。プロのモデルでは得がたい贅沢な時間を提供していただいていると思う。

いい絵は考える時間に比例し、上手な絵は描く量に比例する。しかし、上手な絵が必ずしもいい絵とは限らない、下手な絵でも思い入れを惜しまなければ作者の顔が見えるいい絵があります。

セザンヌは、今芸大を受験すると一次試験で落ちるデッサン力とかですが、描き始める前に異常とも思えるほど対象を眺め続けていたそうです。だから力強い絵なんですよ。(因みに悪い

絵とは何か余計なものがあって、何か足りない絵でしょうか。) 対象の何を描きたいのか(思い入れ)を自問しながらいい絵を目指します。」

世話役のみなさまへ：この得がたい贅沢な時間を今後ともよろしくお願ひします。と結んでありました。

デッサン会終了後のみなさんの満ち足りた表情に、かかわったメンバーも幸せを感じながら会を閉じますが、まだまだ改善の余地があるかもわかりません。知恵を寄せ合いながら育てていこうと思っています。

(文責・美術工芸部長 山本絢子)



岡本欣三さんの作品
(本作品は民藝絵画部で制作したもの)

笠原道汀古稀記念展に寄せて 大川恵翠

H.22年6月15日(火)〜20日(日) アートガーデンかわさき2・3室

笠原道汀古稀記念展が、第十九回秋水会書展との併催として開催された。ゆったりとした空間を演出するため両会場の壁を取り扱いましたが、古稀展としての独自性は大切にされ、会場に入ると奥の壁面一杯に7m20cmの大作、会田綱雄詩「伝説」が山深い湖そのままだに、深い緑色で静かに出迎えてくれました。

先生は日頃書きたい言葉をためていらつしやるので、何を書くかはすぐ決まったようですが、この作品は候補に上っていなかったそうです。七十歳の誕生日を迎えたら、書かずにはいられなくなつたそうです。

生み育ててくれた親への「感謝」の思いを、会田綱雄詩「伝説」に托したその心の奥にあるものが伝わってきて、心打たれました。

一作一面貌を意識されて、大作五点を含む23点の現代詩文は、漢字仮名交じり書。その直線と曲線を調和させるエネルギーは大変なもので、圧倒されてしまいました。

祝賀会も会期中に催され、凌雲社の書道仲間・麻文協を初めとする地域・親戚などごく内々の親しくお付き合い



秋永先生の思い出入れは格別で、蔭のご尽力には手伝う私達も心温まる思いが致しました。

このようすばらしい両師に出会えたことを大変嬉しく思っております。更に「こころを言葉に、ことばを書に」をモットーに市民に愛される秋水書道会でありつづけたいと願います。

最後にお寄せいただいた感想文から▼岸恵子さんのことばには涙が溢れました。今13歳の年頃の娘を子育て中です。自分自身が忘れていた少女時代、また我が娘の気持ちを照らし合わせられたような気がします。もうそろそろ大人扱いしてあげなければ…。

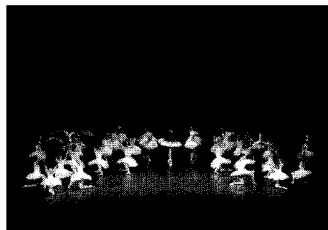
くるみバレエスタジオは本会副会長の伊藤胡桃氏が主催するスタジオで子どもからバレリーナをめざす人たちの育成に頑張っています。

胡桃(くるみ)バレエスタジオ 第12回発表会 菅原敬子

くるみバレエスタジオは本会副会長の伊藤胡桃氏が主催するスタジオで子どもからバレリーナをめざす人たちの育成に頑張っています。

ご自身も音楽家のご両親の次女として生まれ又モダンダンスの伊藤道郎氏は伯父さんでもあられ、その下で学ぶなど、恵まれた環境と才能を発揮しチャイコフスキー記念東京バレエ団で活躍されその後、後進の育成に当たっておられます。

八月一日昭和音大ホールで素晴らしい舞台をみせて頂きました。可愛い子どもから大人まで練習の成果が一目でわかる舞台でした。構成も斬新、衣装も美しく夢の世界に引き込まれる一時でした。会場満席、拍手万雷でした。特にご子息武石光嗣氏のタンゴに魅了。



編集後記

▼企画編集にあたり、会員の活躍の把握、原稿の依頼等頭を悩ます事も多い。▼特に「麻生人物風土記」と表紙を飾る巻頭頁の寺社の絵と文は、部員にとっても楽しい記事である。▼この度、広報部を退かれた松田前部長も進行状況を心配されていることだろう。今年度は二名の新部員が加わり編集委員は六名。▼快く執筆を引き受けて下さった方々をはじめ、皆さまの協力のお陰で、四十九号発行の運びとなった。(関森記)

関森田鶴子・岩田輝夫・畔田二郎
千坂隆男・橋本周・佐藤勝昭

麻生区文化協会会報
からむし 第四十九号
平成二十二年九月三十日発行
発行人 麻生区文化協会
会長 菅原敬子
編集 麻生区文化協会
広報部
川崎市麻生区万福寺一―五―二
麻生文化センター内
☎ ○四四―九五―一三〇〇
印刷 マイタウン21